SPiriT

スピリット

Shimane Physical Therapy

Vol.06 2025.02

Contens

- WPC/
  日本理学療法学術研修大会 開催宣言
- にちけん参加報告
- 学会開催報告
- 学会開催予告
  第22回島根県理学療法士学会
  「1 Action ～想いを形づくる～」
- スペシャル会員紹介
- 令和6年能登半島地震における被災地支援活動報告

発行元：一般社団法人 島根県理学療法士会
Shimane Physical Therapy Association

WPC/
日本理学療法学術研修大会 開催宣言

江草 典政
（日本理学療法士協会　第 60 回日本理学療法学術研修大会 / 企画局長）

みなさんこんにちは。島根大学医学部附属病院の江草典政です。
2025 年には理学療法士に関するとてつもなく大きなイベントが 2 つ同時に開催されることをご存知でしょうか？
そのイベントとは、
〇世界理学療法連盟学会（World Physiotherapy Congress 2025：以下、WPC）
〇第 60 回日本理学療法学術研修大会（にちけん 2025）
この 2 つです。今回は準備委員としてこの 2 つの魅力を県士会の皆さんにお届けします。

【WPC2025 とは？？】

WPC は 2 年に 1 度開催されている世界学会で前回のドバイ大会からバトンを引き継ぎます。
日本での開催は 1999 年に横浜で開催されてから実に四半世紀ぶりの開催が決まりました。世界の理学療法士（Researcher：研究者、Clinician：臨床家、Educator：教育者、Manager：マネジャー）が集う学術総会であり、3 日間にわたって議論が繰り広げられます。

SPiriT が発刊される頃には多くのプログラムが公開されていることと思いますが、Focus symposium（重点シンポジウム）では世界学会ならでは、そして世界レベルの議論を聞くことができます。私がチェックしているシンポジウムにはこんなテーマがあります。

〇Exploring excellence in global stroke rehabilitation
（世界の脳卒中リハビリテーションの卓越性を探究）
→このセッションでは、国際脳卒中回復・リハビリテーション連盟の Rachel C Stockley 氏が議長を務め、WHO のリハビリテーショントピックスを整理された上で、臨床展開について議論されます。

〇Trauma-informed approach to pain: attending to the human aspects of care
（トラウマ・インフォームド・アプローチによる痛みへのアプローチ：ケアの人間的側面への配慮）
→痛みの管理に向けたトラウマへの対処、ケアのポイントを世界的トップランナーの Lester Jones 氏が中心となり議論されます。

【WPC に参加する】

今回の日本開催にあたり、日本人参加者には同時通訳が提供されます。また、通訳がなくとも世界の療法士の活動に触れたり、空気を共有することだけでも様々な体験ができるのではないかと思います。国際学会に参加するためには渡航費などの資金が通常必要ですが、国内学会と比較して高額ではあるものの全体としての経費は抑えて参加が可能です。これを機に世界の空気に触れてみませんか？

【日本理学療法学術研修大会（にちけん）とは？】

“ にちけん ” は日本理学療法士協会最大の研修会です。学術的議論は理学療法学会連合が、そして研修は日本理学療法士協会が担当するようになり今年から作組も新たに生まれ変わります。これまでにちけんは、若手･中堅の研修の場として企画されてきましたが､60 回の記念大会からにちけんは「全世代型プログラム」となります。

【にちけんでできること】

全世代型プログラムとなったにちけんは、以下の機能を有します。

〇認定理学療法士新規取得の場

認定理学療法士を新規で取得する場合、にちけんへの “ 対面参加 ” が必須となっています。

〇登録理学療法士・専門 / 認定理学療法士の継続学習の場

ほぼ全ての研修セッションがポイント対象となっています。

〇全ての領域の理学療法に触れ、インスピレーションを得る場

理学療法学会が専門分化し、様々な領域の知識が一堂に会する機会はほとんど無くなりました。色々な分野を学びたいけれど、様々な学会に行くには時間も経済的な負担も・・・という悩みをもつ方も多かったのではないでしょうか。にちけんでは、そういった学びの困りごとを解消すべく、興味関心を幅広くカバーできるプログラムを用意しています。

〇全ての理学療法士が「理学療法の今」をキャッチアップできる場

にちけんは、技術系セッションをのぞきほとんどのセッションを「オンデマンド配信」します。世の中沢山の研修はあれば「毎年、にちけんに参加さえすれば日本の理学療法の話題を総ざらえできる」そんな場とすべく、各法人学会とも提携してプログラムを提供します。

【今年の “にちけん” の見どころ】

今年のにちけんでは以下のようなプログラムで皆さんのご参加をお待ちしています。

6 つのコア要素

1）WPC（World Physiotherapy Congress2025: 世界理学療法連盟学会）との同時開催

世界基準の思考や課題意識に触れる：基幹シンポジウム、WPC パス（参加費優遇）

2）臨床技能の醸成

研修大会の基盤：テクニカルハンズオン、認定理学療法士プログラム、症例に関するディスカッション

3）理学療法の最前線

国内最高峰の最新情報見本市：日本理学療法学会連合の会員団体である法人学会・研究会ハイライト、理学療法教育の最新動向

4）ネットワークの構築

新たな価値を生み出す療法士のネットワーク：社会活動（職能）セッション、Next Generations 企画

5）コラボレーション

総合知創出に向けた領域を超えた異業種コラボレーション：複数業界、県士会・世代間コラボレーション

6）全世代型プログラム

すべての理学療法士のための大会：高校生、学生、若年世代のスキルアップ、壮年期の最新情報のスキルアップとリスキリング

【シンポジウム】

・基幹シンポジウム１
※世界理学療法連盟との共催企画を検討中
・基幹シンポジウム２
「超高齢社会の価値転換に挑む理学療法士のマスタープラン～ムーンショット目標を見据えて～」
・企画シンポジウム１
［協会×会員］私たちはどこに向かっているのか～生涯学習制度が羅針盤になるために～
・企画シンポジウム２
［県士会×県士会］何を描き走っているのか～非常識から創り出す職能活動の新しいカタチ～
・企画シンポジウム３
［養成機関×学生］みんなで考える養成教育の新しいカタチ～次世代に向かうために教員ができること、学生ができること～

【Expert セッション】

○ " 知と実践：学びを臨床に活かし、アップデートする方法
①神経系領域
②呼吸系領域
③高度急性期領域
④運動器領域
⑤循環器系領域
⑥がん関連領域
○症例報告のまとめ方、症例報告会の取り組み方
○エキスパートから学ぶケースディスカッション

【Professional セッション】

○ライフステージにおける理学療法

【Educational セッション】

○教育を変革する

【Collaborate セッション】

① 2040 年に向けた日本の在宅医療の推進～世界に冠たる訪問理学療法、訪問作業療法、訪問言語聴覚療法の治療効果を目指して～
②理学療法未承認領域へのチャレンジ
③スクールトレーナー (ScT) 制度が創り出す子ども達の未来
④動物に対する物に対する獣医療と理学療法士の協働の可能性
⑤地域におけるリハビリテーション 栄養・口腔管理の連携～医療・介護から健康増進 保健予防まで～
⑥こども子育て支援と女性活躍の推進に向けた連携の可能性～伴奏型支援と産前・産後ケアの拡充～

【Technical セッション】

・基礎教育セミナー
　物理療法の現場実践のポイント　機器の導入交渉～活用まで
・ハンズオンセミナー
①運動器疾患に対する徒手理学療法の基礎
②標準的呼吸理学療法手技の実践
③装具の理解と処方のための基本技術
④ 1on1、コーチングのスキル演習
⑤フィジカルアセスメントの基本技術
⑥運動器の多面的評価の実践
⑦循環器疾患のリスク評価と運動処方
⑧脳卒中歩行障害に対する支援技術
⑨人材育成・キャリア教育のコアスキル
⑩高度急性期の離床の Tips
⑪物理療法の現場実践のポイント　～機器の導入交渉から活用まで～

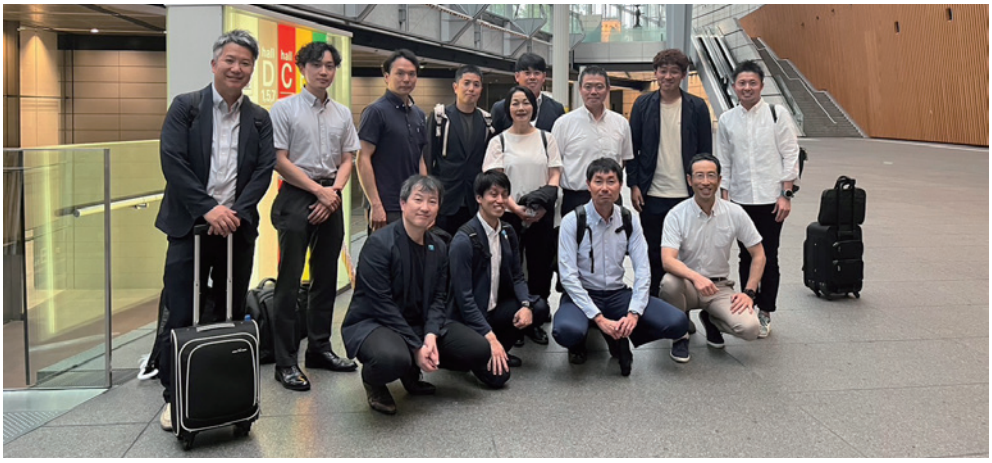
【JPTA 重点セッション】

①産業理学療法の社会実装
② 2040 年を見据えた目指すべき急性期リハビリテーション～新たな地域医療構想と診療報酬改定を踏まえて～

【開催概要】

○ Word Physiotherapy Congress 2025
会　期：2025 年 5 月 29 日（木）～ 5 月 31 日（土）
会　場：東京国際フォーラム
主　催：World physiotherapy

○第 60 回　日本理学療法学術研修大会 2025
テーマ：「総合知を推進する臨床技能　―社会的課題の解決を目指すー」
会　期：2025 年 5 月 31 日（土）～ 6 月 1 日（日）
会　場：東京国際フォーラム
主　催：公益社団法人 日本理学療法士協会（JPTA）



運営スタッフ視察時の写真（前列の一番左が江草典政氏、前列の左から二番目藤丘政明氏）

にちけん参加報告

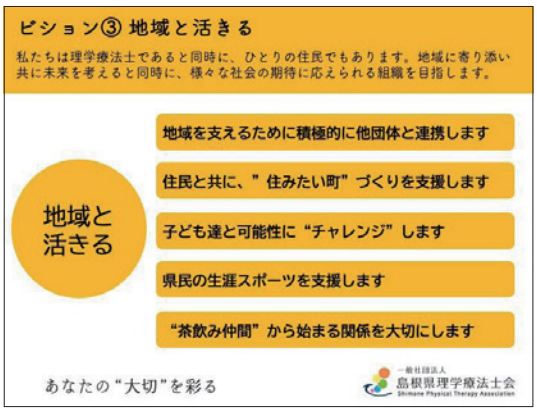
島根県理学療法士会　副会長　**嘉田 将典**

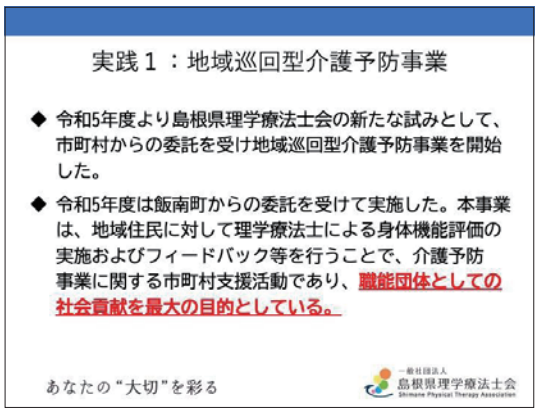
第 59 回日本理学療法学術研修大会 in 東京（2024 年 6 月 29 日～ 30 日開催）において「47 都道府県士会における理学療法士から地域社会への提言・活動報告」をテーマに島根県理学療法士会としての地域包括ケア・スポーツ支援事業をはじめとした地域貢献活動についての取り組みをシンポジウム形式で報告しました。

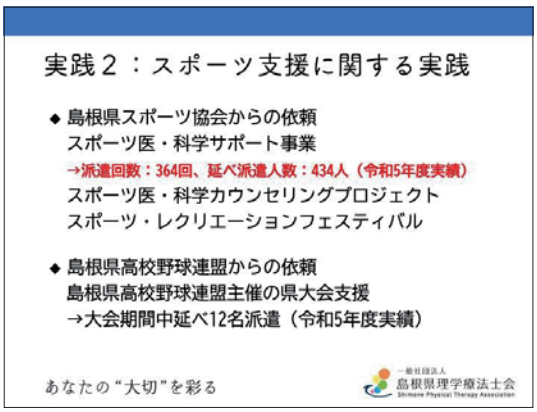
島根県理学療法士会ではミッション・スローガンとして「あなたの大切を彩る」を掲げ、その中で「地域と活きる」ための地域貢献活動に取り組んでいます。当日の報告では具体的な活動として、地域包括ケアシステム推進に向けた介護予防事業に関する活動やスポーツ支援を中心とした学校保健活動などを報告しました。

令和 5 年度から飯南町からの委託を受けて、地域巡回型介護予防事業をスタートさせました。この事業の成果として、継続的に地域ケア会議・介護予防に関する人材育成を行っており、地域における実践において専門的かつ的確な機能評価とフィードバックが行えたこと、地域住民・行政からの評価が非常に高く、職能団体としての社会貢献につながったこと、事業を行うことで一定額の会費外収入を得ることができたことが挙げられます。

スポーツ支援の分野では、島根県スポーツ協会からの依頼を受けて行うスポーツ医・科学サポート事業や全国高等学校野球選手権島根大会へのトレーナー派遣事業の取り組みを報告しました。加えて、実践を通じた地域貢献と人材育成を両輪で行うサポーター会員制度についても紹介しました。







シンポジウムでは、宮城県理学療法士会及び、和歌山県理学療法士協会からそれぞれ取り組み報告がありました。

一般社団法人　宮城県理学療法士会からの報告概要

「地域リハビリテーション活動支援事業の７年間の活動を通して」

宮城県リハビリテーション専門職協会では、県市区町村や本事業に関連する団体に対して各種支援事業を展開している。参加される住民の希望や通いの場の“ありたい姿”に応えるために、理学療法士は地域リハを支える社会資源の多寡や住民の生活特性を十分に把握するために、事業関係者ならびに住民との対話を重視することが大切。

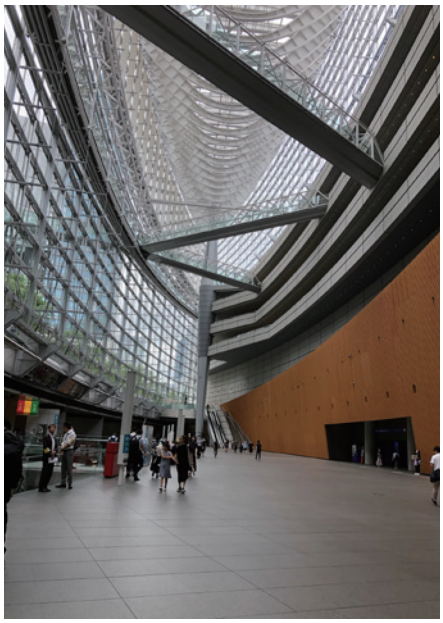
公益社団法人　和歌山県理学療法士協会からの報告概要

「和歌山市で行っている住民主体の通いの場立ち上げ支援の実績と今後の展望」

和歌山市で行われている「WAKAYAMA つれもて健康体操」は、2016 年から和歌山県理学療法士協会を中心に運営されており、現在では 136 グループ、約 1500 名もの和歌山市在住の高齢者が参加している。通いの場立ち上げ支援をリハビリテーション専門職と地域包括支援センターが連携して工夫しながら実施している。

＊＊シンポジウムを通じて得た学び・今後の課題＊＊

島根県理学療法士会に限らず、他県士会でも地域貢献活動、実践を通じた人材育成、地域における理学療法士の職域拡大に向けて積極的に取り組みを進めている様子が伺えました。その際に、どのように会員を巻き込んでいくかが共通する大きな課題の一つです。島根県士会でもサポーター会員制度を構築しているが、今後も様々に工夫を凝らして多くの会員と共に事業を進めていきたいと考えています。



シンポジウムの様子

会場の東京国際フォーラムは、アメリカ在住の建築家ラファエル・ヴィニオリ氏がデザインされた建物で広々した美しい会場でした。

学会開催報告

第 21 回島根県理学療法士学会　学会長　**廣瀬 強志**

第 21 回島根県理学療法士学会を、2024 年 5 月 25 日（土）と 26 日（日）の 2 日間、島根県芸術文化センターグラントワを会場として、「つなぐ」～未来を彩るバトン～をテーマに開催いたしました。本学会のテーマ『つなぐ』は、理学療法士同士の連携はもちろん、他職種・他団体との協働、そして自分自身の未来から次世代への継承まで、多岐にわたるつながりを象徴していました。このテーマの実現に向けて、演題発表や講演を中心とした様々な企画を実施させていただきました。

島根県西部、益田市での初めての開催ということもあり、不安も多かったですが、学会事前企画や他団体招待企画など、様々な取り組みが実を結び、県内会員数 742 名の県学会にも関わらず、567 名もの方々にご参加いただくことができました。
離島もあり東西に長い島根県ですが、今回の学会を機に、理学療法のさらなる発展を県全体で目指していけるようになっていく事を期待しています。

今回の学会では、過去最多となる 40 件の演題発表があり、会員の約 20 人に 1 人以上が発表するという活発な状況となりました。これは、学術局を中心に、学会の意義や抄録・スライド作成のノウハウをまとめたコンテンツの公開や、抄録作成サポート体制の整備など、発表を初めて行う会員への支援を継続してきた成果とも感じています。
実際に、今回が初めての演題発表という方が非常に多かったことが印象に残っており、会員の皆様にとって、未来に向けての第一歩となる貴重な機会となっていれば嬉しく思います。

今回の学会での活発な議論や情報交換をきっかけに、参加された皆様に多くのつながりが生まれ、「あなたの “ 大切 ” を彩る」ための新たな一歩を踏み出すきっかけとなっていく事を願っています。

今回の学会第 22 回島根県理学療法士学会へ「バトン」は引き継がれました。これからもより良い未来を目指し、皆様の更なるご活躍と、学会への変わらぬご支援を心よりお願い申し上げます。

左から第 21 回学会長：廣瀬強志、第 22 回学会長：馬庭春樹

左から第 22 回学会長：馬庭春樹
第 21 回学会長：廣瀬強志
第 20 回学会長：高見由美
第 19 回学会長：大森貴志

本学会に関わったすべての皆様に深く感謝いたします。

学会開催予告
第 22 回島根県理学療法士学会
「1 Action ～想いを形づくる～」

第 22 回島根県理学療法士学会　学会長　**馬庭 春樹**

第 22 回島根県理学療法士学会（県学会）の学会長を務めます、松江総合医療専門学校の馬庭春樹と申します。本大会は 2025 年 6 月 14 日・15 日に松江テルサにて開催予定です。テーマは「1 Action ～想いを形づくる～」といたしました。

“1 Action” という言葉は、近年の県学会でスローガンのように使われてきました。私自身、この言葉が大好きで、「小さなことからでも、自分の “ 想い ” を “ 行動 ” に移すこと」を意味するものと解釈しています。小さな “1 Action” が積み重なり、多方面へ広がっていくことで、少しずつ “ 想い ” が具体的な形となっていくのだと考えています。

本大会でもこの意志を受け継ぎ、会員一人ひとりの “1 Action” を大切にする学会でありたいと考え、本テーマを設定いたしました。また、学会のイメージ画像では、一人ひとりの “ 想い ” が多彩な色で描かれ、それが一つの形として現れる様子を水彩画で表現しています。

県学会は「共に学び、共に育つ場」であり、初めての学会発表を支援する学会でもあります。本大会でも、前回に引き続き「抄録作成サポート」と「発表者への講評」を取り入れています。「抄録作成サポート」は研究支援部と連携し、県内の認定・専門理学療法士が抄録作成を支援する制度です。学会発表が初めての方や抄録作成に不安がある方も、安心して演題登録へと向かえるようサポートを受けることができます。「発表者への講評」では、希望される方は発表後に次のステップに向けたフィードバックを受けることができます（演題数が多数の場合、一部の発表者のみが対象となる場合もございます）。これらの支援制度を活用いただき、県学会での発表が皆様にとってステップアップのきっかけとなることを期待しています。

本大会のプログラムは、「学術的基盤の構築」と「教育的基盤の構築」という 2 つの柱に基づいて企画しました。これらは、会員が “1 Action” を起こし、“ 想い ” を形づくるための重要な土台となると考えています。基調講演、教育講演、シンポジウムはこれらの要素を中心に据え、構成しました。

基調講演では「統計解析や研究デザイン」に焦点を当て、“ 想い ” を形づくるための基礎的な学術的知識を学びます。教育講演①では「スコーピングレビュー」を取り上げ、臨床での疑問を形づくるためのヒントとなる内容をお届けします。さらに、教育講演②では「学習科学」をテーマとし、職員教育や学生教育における基礎的な学習理論を学びます。シンポジウムでは、島根県内の養成校教員・実習指導者・学生が一堂に会し、「島根県における臨床実習」についてディスカッションを行います。

また、市民公開講座では「インクルーシブなまちづくり」をテーマに、理学療法士だけでなく、他職種の方々や障がいを持つ当事者の方々にも興味をもっていただけるような企画を準備しています。これらのプログラムを通じて、会員の皆様が学ぶ楽しさ･ワクワクを感じるとともに、“1 Action” を起こすための学術的･教育的基盤を築く一助となることを願っています。

松江市での開催は第 17 回大会（2017 年）以来であり､松江テルサでの県学会開催は第 8 回大会（2008 年）以来のこととなります。今後、松江テルサは廃止される可能性があるため、本大会が同会場での最後の県学会となるかもしれません。

県学会は、島根県内の会員同士の繋がりを育む場でもあります。ぜひ歴史ある松江テルサにお集まりいただき、日々の活動について熱く語り合いましょう。「学会を通じて “1” を創り出す」という県学会のミッションを実現できるよう、準備を進めてまいります。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

【概要】
1．名　　称　　第 22 回島根県理学療法士学会
2．テ ー マ　　「1Action- 想いを形づくる -」
3．会　　期　　2025 年（令和 7 年）6 月 14 日（土）～ 15 日（日）
4．会　　場　　松江テルサ（松江勤労者総合福祉センター）
5．開催方法　　会場とオンラインとのハイブリッド開催
6．学 会 長　　馬庭春樹（松江総合医療専門学校）

スペシャル会員紹介

地域と組織を守りながら、士会事務局長を10年間務めた

吉岡 健太郎 先生

雲南市立病院
リハビリテーション技術科科長

01 現在のキャリアのきっかけや ここまでの活動を教えてください

平成９年（1997 年）４月に免許を取得して理学療法士になってから 27 年経ってしまいました。今年で 49 歳なので人生の半分以上、理学療法士をしているんですね。よく頑張ってくることができたとしみじみ感じています。定年まで何とか頑張りたいのでその頃には今よりもっと感慨深く感じるかもしれませんね。

ご縁があって雲南市立病院に入職して、当時は PT が５人、OT 含めて８人の職場でした（今は計 37 人のスタッフになりました）。急性期から回復期、地域包括ケア病棟、訪問リハビリと色々な現場での経験をさせていただきました。ありがたいことに各病期での考え方を学ぶ事ができました。

入職してから年数が経ち、スタッフの増員希望がきっかけで少しずつ所属科の実績管理をするようになりました。

業務の規模も拡大しスタッフ数も増えてきたころから「リハビリテーション技術科はこれからどんな方向性をもっていけばよいのか？」という漠然としたことを思うようになりました。

なんだか悶々とした思いを抱えながら、何をどこから、どのようにすればよいのか悩みながら日々過ごしていました。

そんな時に県士会役員の合宿がありました。この県士会役員のミッション・ビジョン作成の合宿の経験が私にとって、組織の在り方、課題解決の糸口を考える上でとても助けになりました。

現在は所属長という役職に就き、「リハビリテーション技術科としてこれから院内でどのような役割を果たすべきか、地域へどのように貢献していくべきか」、そのための人財育成の対策を考える機会がとても多くなりました。まだ、目標達成するには道半ばですが日々精進しているところです。

県士会としては、入職と同時に入会し、程なく当時の上司に部員に誘われたのが始まりでした（すぐ近くに県士会役員の存在があったことは大きかったですね）。

数年後に理事になり、そこから一気に多方面の方とのつながりも増え、諸先輩方に育てていただきました。

02 仕事をする上で、大事にしていることを教えてください また、やりがいに感じることを教えてください

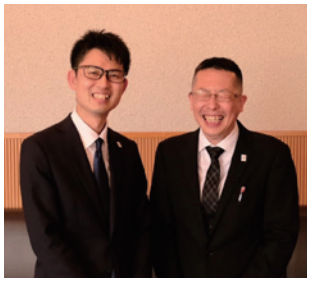
理学療法士になって 27 年経って、以前から変わらず大事にしていることはごく基本的な事ですが「挨拶」と「なるべく笑顔」ですね。

高校の時の体育会系の部活とリハ養成校の時に叩き込まれました（笑）。

大事にしている考えとしては、対象の方やそのご家族に対しては「支援させていただく、協力させていただく」

ということを常に思いながら関わるようにしています。
　仕事上では、対象の方により良き方向へ向かっていただくには自分一人ですべてできることではなく、関係職種の相手を知り、受け入れて協力する。ということを大事にしています。理学療法士になって数年はあまり思わなかったのですが、訪問リハで地域医療を経験してからは、特に強く思うようになりました。
　達成感、満足感という意味では自分の立場の変化に伴って、やりがいは変わっていったような気がします。
　理学療法士になってから５年目くらいまでは、とにかく患者様に良くなってほしい。自分が頑張って成果を出すことに強いやりがいを感じていました。
　10年目あたりは地域医療、地域リハビリを経験した時期ということもあり、自分が優位になって事を成すというよりも、関係する色々な職種の方と協同して成果を挙げることにやりがいを感じていました。
　今、所属の長になってからは、どうすればスタッフのストロングポイントを活かして、活気のある組織づくりができるのか、リハビリ専門職として病院や地域に少しでも貢献することができるのかということにやりがいを感じています。
　今更ながらもっと早くから組織マネージメントを勉強していればよかったと後悔しています（苦笑）。

03 長年事務局長としてつとめられた中で、大変だったことや、やってて良かったと思うこと、変化があったと思うことは何ですか？



　島根県士会の事務局長を５期10年間の長い間勤めることができたのは士会役員の皆さんの支えや家族、職場スタッフの理解のおかげです。自己肯定感が低めの私にとって10年間も局長として頑張れたことは自分としては自己肯定感を多少上げることができたのかなと思っています。
　大変だったことは、沢山ありましたね。その分、得るものも沢山ありました。
　今では事務所も設置し事務員もおられますが当時､県士会の窓口は事務局でした。様々な各所からの連絡や問合せの多くが事務局にきていたので、対応の多くを事務局長がしていました。年間を通して常に対応していたので、それが大変でしたね。
　元々器用な方ではないので、仕事や士会業務、家庭とのバランスはとっても上手くできていませんでしたね。子供が小さい頃には仕事と士会業務に集中していることが多かったので、家族にも迷惑をかけてしまった事は大変なことでした。幸いにも私の妻も県作業療法士会で役員を務めていましたので、そのあたり役職の大変さの理解が多少あったことは救いでした。
　その反面、事務局長として様々な方と対応させていただいたおかげで行政の方や県外の理学療法士会役員の方、協会の方、他職種、他業種の方とつながりを作ることができました。一会員として病院勤務していると関わることは無かったかもしれないような方と知り合えたことは大きな財産の一つだと思っています。また、対外との関わり方を学ぶ機会も多く、社会人として成長できたことも事務局長に就いていたおかげだと思っています。
　県士会が法人化して後、試行錯誤しながら組織として成長していく過程を歴代の理事の皆さんや小川会長はじめ嘉田副会長、江草副会長、理事の皆さん、部長の皆さんと一緒に歩むことができたのは私にとってかけがえのない時間でした。

04 若い会員へのメッセージをお願いします

　私の年代になると、よく口にしてしまう話題ですね。場合によってはタブー扱いです（笑）。
　時代も社会情勢も変化し、価値観も変わっています。こんな私なので偉そうなことも言えません。
　私の失敗経験から学んだことをアドバイスとしてお伝えできることは、リハ職を含め他職種・多職種の方とつながり、多くの価値観に触れてください。学生のころから専門的な学習をし、専門職の環境にいると価値観が偏ってしまいがちになります。色々な考え方に触れ思考の幅を拡げるようにしましょう。
　目の前の対象者の方の思いを受け止め、他職種と協調し合いながらより良いサービスが提供できると思います。
　私と同年代のくらいになると若い会員の価値観を理解したくても理解し難かったりすることもあります。県士会のホームページも殆ど見たことがない方もおられると思います。そんな時はどうぞ若い皆さんから情報を入れてあげてください。

令和６年能登半島地震における被災地支援活動報告

医療法人田本会訪問看護ステーションありがとう　**濱田　龍**

○令和６年１月１日 16 時 10 分

令和６年１月１日 16 時 10 分、令和６年能登半島地震が発生しました。最大震度７の揺れを観測したこの地震では、前震を含めると１時間で５回も震度５強を超える揺れが発生しました。また、地震に伴う家屋の倒壊や土砂崩れ以外にも輪島市で大規模な火災が発生したことは皆さんの記憶に残っているのではないでしょうか。地震が発生した時、私は帰省していた九州の実家から島根へ戻っている途中でした。運転中にスマホから繰り返される通知音に感じた不安感は今でも覚えています。

地震発生後、島根 JRAT 内でも派遣調整が行われ、１月 15 日に JRAT 本部から連絡があり、２月 21 日～ 23 日の３日間被災地支援に行くことが決まりました。その時の経験、そして感じたことをご報告させていただけたらと思います。

○長期滞在が課題となっていた 1.5 次避難所

活動前日にオリエンテーションを受けるために災害対策本部のある金沢市に到着しましたが、金沢市内は震源地から離れていることもあり、発災から約１ヶ月半が経過した２月中旬頃はほとんど地震の影響を感じることはありませんでした。しかし、災害対策本部や避難所内に入るとその空気感は一変し、たくさん設置されたテントやパーテーション、避難者向けに掲示板にたくさん貼られた情報など、避難所の外と中では別世界のようにすら感じたのと同時に、３日間私にできることを頑張ろうとあらためて気が引き締まる思いでした。

今回、私が派遣されたのは石川県金沢市の 1.5 次避難所に指定されているいしかわ総合スポーツセンター（以下、スポーツセンター）でした。1.5 次避難所は、健康面や身の回りのことに不安を抱えている方が２次避難所や福祉施設等への避難を待機するために一定期間生活する場所です。スポーツセンター内は介護の必要性に応じて３つの区画に分かれており、被害の大きかった石川県北部の方を中心に全体で約 200 名弱の方が避難しておられました。当初、スポーツセンターでの避難は福祉施設等への受け入れ決定までの２日程度を想定していたようですが、県内の福祉施設等の空きの状況などからなかなか避難先が決まらず、２週間以上長期滞在される方もおられ、問題となっていることがメディアでも報じられていました。私が派遣された時期は介護度の低い方に関しては比較的早期に次の避難先へ移れるようになってきたようですが、介護度の高い方が生活される区画はまだ退所される割合が低い傾向にありました。

避難者の長期滞在に伴い、再介入が始まるケースがある一方、新規の避難者や JRAT での継続的な介入者数は減少傾向にあり、JRAT の撤退時期の検討が始まった時期でもありました。これらのことから現在ど

れぐらいのニーズがあるのか、今後の介入をどうするかを検討するために『避難所の全体像の把握』をミッションに活動を行ってきました。

◯避難所での活動と役に立った日々の現場での経験

今回の派遣で島根 JRAT からは私含め 2 名で現地入りしており、3 日間の活動は他県の JRAT との合同チームで 1 チーム 4 名で活動を行いました。活動内容は避難者のリハトリアージと環境調整が主な活動になります。

リハトリアージは DMAT などが行うトリアージと同じように避難所内でのリハ介入の優先度の評価です。基本動作・ADL の状況を確認し、歩行・立ち上がり・食事・排泄の状況から 5 段階でリハ介入の必要性の評価を行います。今回の活動では、避難所の全体像の把握がミッションだったこともあり、終了者の再トリアージも行いました。

環境調整では、テント出入り口の段差解消や歩行器等の福祉用具の調整等を行いました。スポーツセンターが 1.5 次避難所ということもあり、歩行器や車椅子、手すりなどの福祉用具も少し入っていたため、できることもいろいろありましたが、普段だったら簡単に高さ調整の行えるベッドも避難所では段ボールベッドで高さも同じため、現在使用できる物品でどうやって活動量が落ちず、転倒を予防できる環境を作るかをチーム内で検討して調整を行いました。

被災地での支援活動と聞いたとき、どのような活動をするのかイメージが湧きにくい方もいらっしゃるかと思いますが、私の活動内容と皆さんの日々の臨床を比べてみたとき、重複する部分がある方もいらっしゃったのではないでしょうか。特に今回私が活動したスポーツセンターのような 1.5 次避難所などの場合、訪問や施設等で働いておられる理学療法士の方が活躍できるような場面がたくさんあると感じました。私自身も、歩行器や車椅子の調整などの知識もすごく役に立ち、他のチームのお手伝いをさせていただく機会もありました。被災地活動というと DMAT や JRAT など総合病院や大学病院などの理学療法士の活動と感じてしまう方もいらっしゃるかもしれませんが、通所リハや訪問などの療法士だからこそ活躍できる場所もあると感じました。

○これから私たちにできること

災害と聞いたとき、どこか他人事に感じてしまう方もいらっしゃるのではないでしょうか。しかし、災害はいつ・どこで起こるか分かりませんし、もしかしたら皆さん自身は大丈夫でも、皆さんの大切な人が巻き込まれてしまう可能性もあるかもしれません。今回のスポーツセンターでの活動を通して私自身もあらためて私事として災害を捉えることの重要性を感じました。これから私達ができることですが、『備えること』『忘れないこと』の２つのことがあると私は思います。

まず、『備えること』は防災・減災に向けての準備です。いますぐできることとしてローリングストックをおすすめします。皆さんのこの１～２週間の食料品の買い物を思い出していただいた時、繰り返し購入しているものはありませんか。ペットボトル飲料やカップラーメン、お菓子など賞味期限に余裕がある食べ物は常時ストックしておくことができ、災害時の非常食として使うことができます。なくなったら補充するというサイクルを行うことで災害が起こった際の対策を行うことができます。また、我々理学療法士として関与していきたいのは生活不活発病の予防です。こちらに関しては当士会の災害支援対策委員が HP 上で資料を公開しておりますので、ぜひご一読いただけたらと思います。

２つ目は『忘れないこと』です。国内で大きな災害が発生したとき、しばらくは防災・減災に対する意識が高まるかもしれませんが、日に日にこの意識も薄まってくる傾向にあると思います。私自身が忘れないようにするために行っているのは年に１度の防災リュックの点検です。毎年同じ日を決めておくことであらためて防災に関する意識を高めるだけでなく、賞味期限が近づいた非常食の買い替えなども行えますので災害に備える準備を行うこともできます。

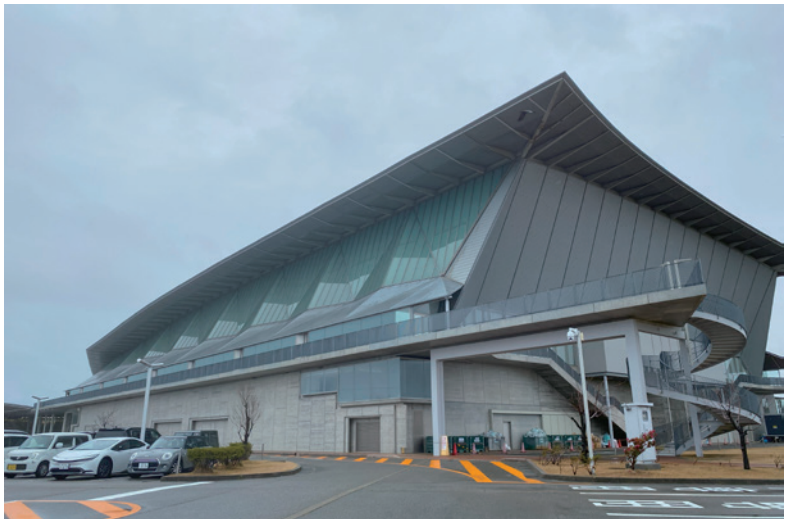
災害の対策は発生してからはできることはあまりないかもしれませんが、今からできることはたくさんあります。皆さん自身もですが、家族や友達など大切な人のための準備をしておくこともいいかもしれません。『備えること』『忘れないこと』をぜひ皆さんにも取り組んでいただけたらと思います。

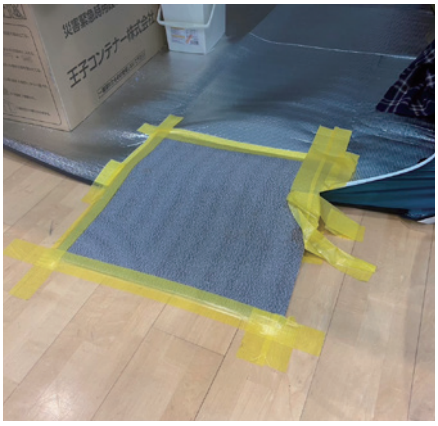
○おわりに

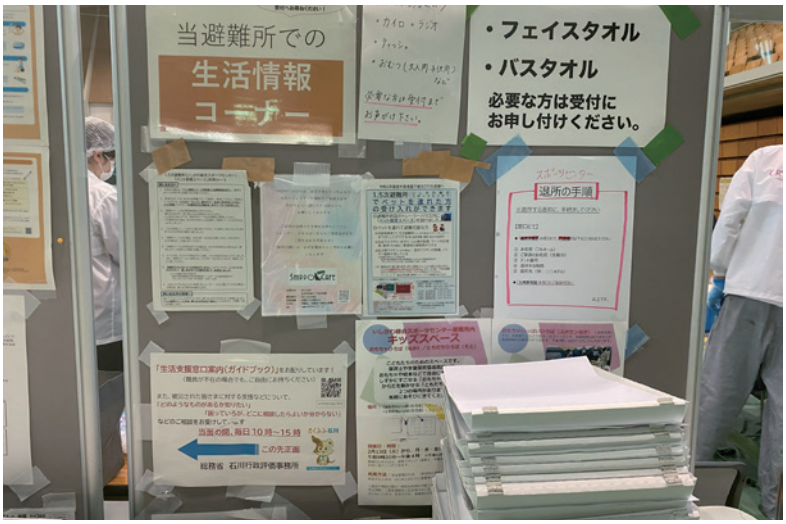
今回、私が能登半島地震の支援に行くにあたり、本当に多くの人に助けていただきました。サポートしてくれた職場のみんな、JRAT 事務局の皆さま、応援のメールをくださった皆さま、そして私の大切な家族に心から感謝しております。

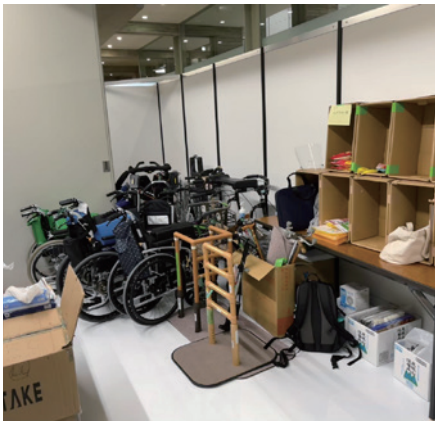
能登半島地震での JRAT の活動は終了しましたが、石川県では１月の地震に続き、９月に発生した奥能登豪雨で再び被害が発生していることがメディアでも報じられています。被災者の方々が一日も早く日常を取り戻すことを心から願います。

写真右から濱田龍（本会）、
熊谷英岳さん（山陰言語聴覚士会）






当避難所での
生活情報
コーナー
・フェイスタオル
・バスタオル
必要な方は受付に
お申し付けください。
退所の手順
キッズスペース
この先正面



［ 編 集 後 記 ］

「もっと島根県理学療法士会のつながりを深めたい」という思いから2019年に県士会ニュースをリニューアルいたしました。会員向けの冊子「SPiriT（スピリット）」はラテン語で「魂」「勇気」「活気」の他に「呼吸」「息」という由来を持つ言葉であります。会員の息遣いを感じ、勇気や活気が湧くような冊子にしたいという願いを込めて名付けました。

島根県理学療法士会では研修会や学会の開催の他に、地域での介護予防事業やスポーツ推進事業などの様々な事業を行なっております。会員１人１人の成長を応援すると同時に、地域への貢献も実現してまいります。

本冊子が、会員の皆様にとって、有益でつながりを感じていただけると幸いです。

SPiriT編集　野口瑛一

［ ご協力のお願い ］

・県士会の“つながり”を作っていくためにも、原稿依頼をさせていただくこともございます。ご協力をお願いいたします。
・このような内容でまとめて欲しいなどご要望がございましたら、お問い合わせ先までご連絡ください。

島根県理学療法士会
ホームページ

島根県理学療法士会
Facebook

島根県理学療法士会
Instagram

島根県理学療法士会
x（旧 Twitter）

お問い合わせ先

〒693-8501　島根県出雲市塩冶町 89 － 1
島根大学医学部附属病院　リハビリテーション部
島根県理学療法士会　広報部　松本拓也
メール：spta.information@gmail.com